

書 評

伊東さなえ. 『ネパール大震災の民族誌—共同性と市民性が交わる場で災害に対応する』ナカニシヤ出版, 2024年, vii + 192 p.

前田昌弘*

本書は2015年4月25日のネパール大地震によって被災した村の再建をめぐる人々の対応を丹念に描き出したものである。本書が主なフィールドとする首都カトマンドゥの南西にあるネワールの集落P村は、地縁・血縁や伝統的な祭礼等を通じて構築されてきた「村」と西洋近代的思想の流入や開発のなかで芽生えた市民社会を意味する「サムダーヤ」が交錯する場である。そのような共同性と市民性が交わる震災の現場において、現地の人々は、国家や援助機関の介入のもと進んでいく復興支援をどのような論理のもと地域に取り込み、レジリエンシー（選択的回復力）を発揮しているのだろうか。

著者はかつて、ネパールでJICA青年海外協力隊として廃棄物対策プロジェクトに関わっていた。外部者として開発の実務に関わった経験は、本書においても復興支援をめぐる違和感の記述や人々の災害廃棄物（瓦礫）の扱いの分析等に活かされている。本書自体は復興プロセスの観察に即した震災の民族誌であり、著者は知人が主宰する地域復興プロジェクトの寄付者になったりもしている

が、復興支援や開発をめぐる何か直接的な問題提起や課題解決は目指してはいない。とはいえ、上述した著者の経歴・経験や震災後のコミットメントが、村をめぐる国際社会からの支援や多様なステークホルダーをめぐる複雑な力学に対する広い視野の確保ときめ細やかな記述を可能にしている。復興支援や開発の実務と距離を保ちながらも、復興において見過ごされがちな視点や固定化された現場の捉え方の問題性を鋭く指摘するなど、著者の実践感覚が本書全体に通底している。そのため、評者のような、防災や復興の実務的・実践的側面にどちらかというに関心をもつ人間にとっても本書は大変示唆的な内容を多分に含んでいた。

各章の内容を簡単にまとめ評者のコメントを添える。

第1章では震災前のP村において伝統的な「村」がどのように想像／創造され、また、どのようにして「サムダーヤ」が生じていったのか検討している。そして、特に1960年代以降にP村が変容した要因として、①人口増加や家屋の更新に伴う村の境界の曖昧化、②国民国家の形成に伴う排他的な領域をもつ地方自治体の形成、および自治体と村の境界性のズレの発生、③開発による社会経済的カテゴリー（たとえば女性同士）やイシューに基づく新たなつながりの創出を挙げている。被災地の復興では、被害が激甚であるほど、災害後の状況への即時的対応に終始しがちである。それは被災して家族や住まいなど大切なものを失った当事者の感情を考慮すると無理もないことである。しかし、とも

* 京都大学大学院人間・環境学研究所

すると災害を機とした開発や改善の名のもとに外部から画一的な復興計画が押し付けられ、もとの地域の姿を一変させる状況を招きかねない。本章では震災前からのP村の変化を丁寧にたどっており、それは震災後の人々の対応や地域の変化を語るうえで重要な補助線となっている。

第2章では災害を契機に高揚した「私はネパール人」というナショナリズムについて検討している。そして、震災後のネパールでは、政府と被災者がそれぞれ抱く国際的支援への不信感に裏打ちされ、国家ナショナリズム的な言説と「被災したネパール人同士の助け合い」という市民社会的な言説が合流したことを明らかにしている。東日本大震災からの復興でも「絆」という合言葉とともにNPO等の支援者による地域の絆を活かした共助や住民同士の互助（助け合い）を称揚する風潮がにわかに広まった。そこでは被災地から離れた都市に住む人間が抱く村落共同体へのノスタルジーと中央主導の復興にとって都合の良い共同体像が想像／創造されていた。そして、地域コミュニティの問題解決力への過度な期待や負担の押し付け、共助・互助からこぼれ落ちる人々への配慮の欠如といった点が一部で批判された。ネパールの場合、多様な民族、言語、カーストが存在し、また、P村にみられるように国際的支援のネットワークが日常に組み込まれてきたという、日本の地方とは異なる社会背景があるなかで、震災を機にナショナリズムの高揚とともに人々の関係性がよりダイナミックな形で組み換えられ、そのなかでレジリエンシーが

発揮されていったのだと想像される。

第3章ではP村における住民による復興支援活動「サムダーヤ コカーム」の詳細な描出を通じて、サムダーヤが単純に公共的なものを指すわけでも伝統的な村を指すわけでもなく「私たちの地域（ローカリティ）」という人々の感情の構造に立脚していることを明らかにしている。また、彼らの活動は、その活動主体および活動対象の境界が柔軟で曖昧であったからこそ開かれた包摂性を保ち得たのだということを指摘している。この柔軟かつ曖昧であるがゆえに包摂的であるという指摘は示唆的である。また、P村を実体としての地域そのものでもなく、かといって地域から完全に浮いたものでもなく、地域（ローカリティ）という次元からみつめようとする著者の視座が明示されている。そこで、柔軟かつ曖昧でありつつも共同体としての一定のまとまりを保ち得ているのはなぜか、という疑問を読者に抱かせ、第4章、第5章での共同体の儀礼の記述へと誘う橋渡しとなっている。

第4章では「牛の巡行」という祭りに着目し、祭りの開催はコムニタスのもつ再秩序化の力を用いて村の内側と外側、日常と非日常、人の世界と異界との境界を再構築するものであった点を明らかにしている。一方で、これはただ単に伝統的な村が再構築されたわけではなく、瓦礫の撤去にグローバルな友人たちのネットワークが用いられるなど、伝統的な村とサムダーヤ的なものが並列する地域（ローカリティ）のなかで祭りが実行されたと考察している。巡行はラーケー（魔物）の

登場や仮面行列、道化たちの様子とともに生き生きと描かれている。また、カラーの地図と写真で村の物理的境界（門）、「マト」と呼ばれる瓦礫の集積点、牛の巡行ルートの関係が示されている。特に、「マト」（ネパール語で土や泥）という呼称も含め、人々の瓦礫の取り扱いについての記述は興味深い。P村では震災で倒壊した家屋の残渣も決して単なるゴミや不浄なものとは捉えられていなかったという。だとすると、倒壊しかけた家屋や瓦礫が山積みされ、一見すると村の復興が遅々として進んでいないようにみえる風景の意味も違ってみえてくる。それは、彼らの暮らしを構成してきたマトに人々が儀礼を通じて集合的に働きかけ、彼ら自身を再構成する瞬間を待つという、彼らの回復にとって欠かせない豊かな時間を象徴する光景であったといえるのではないか。

第5章では、震災による死者が通常の生と死の連環のなかに位置づけられていく過程を震災直後の儀礼および震災から3年経過後の儀礼から明らかにしている。そして、震災による死者たちの死は非日常的で無秩序な「悪い死」ではなく、日常的で秩序のなかにある「良い死」とされ、それにより死者たちは地域（ローカリティ）に包含されたと述べている。この、震災の犠牲者への当事者の向き合い方という視座は、従来の工学を中心とする災害復興研究では完全に抜け落ちてきたものであろう。「被災者ひとりひとりを忘れない」「悲劇を二度と繰り返さない」といった一見まっとうだが紋切り型の文言が災害のたびに被災地で繰り返されるのはなぜか、復

興の名のもとに死者や残された者の尊厳がなおざりにされていないか。震災と死者〔北原2021〕は、復興のあり方を問い直すうえで重要な視点であり、今後、分野越境的な研究へと展開することが期待される。

以上のように本書は、地域（ローカリティ）において市民性と共同性が媒介されたことで、震災復興におけるグローバルな市民社会ネットワークの資源の活用と、生の意味をもたらす「村」へのコミットメントが可能になったことを明らかにしている。著者が述べるように、そのことによる伝統的な「村」と外部の支援者たちという二分法を乗り越えた災害研究、および具体的な土地や神霊、人々の関係性の分析に立脚したコミュニティと市民社会の関係に関する研究に対する貢献を果たしている。

本書は、人と人以外の事物が混成するネットワークとしての社会、いわゆるポストヒューマニズムなどと呼ばれる現代の思想的潮流を踏まえたものであると思われるが、それについての本書の記述は控えめである。このことは理論的・抽象的な記述よりも、フィールドでの即地的な記述をより重視した結果であると思われ、本書の価値を貶めるものではない。むしろ具体的な記述を通じて理論の検証や他地域との比較が可能になると思われる。評者も、インド洋津波後のスリランカ南部沿岸集落の再定住の様態について研究してきたが〔前田2016〕、そこで試みた、土地や人々の活動を媒介として発現するレジリエンスの分析は本書と響き合う点多々あり、興味深い。コミュニティ研究の嚆矢であ

るマッキーヴァーの多元的国家論 [マッキーヴァー 2009] を持ち出すまでもなく、コミュニティは本来、この概念から通常考えられるよりも広い外延を有しており、特定の空間に収まるものではない。本書でも SNS 上の発信や関係者のやりとりの様子がたびたび紹介されているように、近年の情報技術・発信手段の拡張が、特定の空間に還元されないコミュニティ、本書でいうところの地域（ローカルティ）の成立可能性を飛躍的に高めている。近年の日本では都市でも地方でもコミュニティの衰退が顕著であり、高まる災害リスクへの悲観的なムードが漂っている。人や人以外の事物との積極的な情報交流、やりとりこそが、たとえ量的拡充がなくとも、また、災害で失われたものは元に戻らなくとも、人々の関係性を組み換え、暮らしの質と生の基盤を維持する鍵となる。このことは本書を通じて、震災後を生きるネパールの人々の生き生きとしたやりとりから学んだことである。

引用文献

- 北原糸子. 2021. 『震災と死者—東日本大震災・関東大震災・濃尾地震』筑摩書房.
- 前田昌弘. 2016. 『津波被災と再定住—コミュニティのレジリエンスを支える』京都大学学術出版会.
- マッキーヴァー, R. M. 2009. 『コミュニティー社会学的研究：社会生活の性質と基本法則に関する一試論』中久郎・松本通晴監訳, ミネルヴァ書房.

内藤直樹・森 明子編. 『寄食という生き方—埼玉の政治・経済の人類学』昭和堂, 2025年, 412 p.

北嶋泰周*

本書は、国立民族学博物館共同研究「カナとチカラの民族誌」（代表：内藤直樹）で試みてきた議論を、『ケアが生まれる場』（森明子編, ナカニシヤ出版）の続編として展開させたものである。本書の主題である「寄食」とは、ギリシャ語の para-（横に）と sitos（食物）からなる「他人の傍らで食べる者」を原義とし、日本語では居候や食客、厄介者、英語では寄生を意味するパラサイトとして知られている。

本書の「はじめに」において森は、セールの『パラジット』を引きながら、寄食関係は状況と視点によって変化し、「主体と対象が一对一で対応するのではなく、一对多で対応する関係性が構想されている」（p. ii）と言及する。これは、ケアという関係性がケアする者からされる者へ単線的に向かうわけではないという見方を基盤にしていると同時に、主客の二元論に回収されない視座でもある。

また、序章において内藤は、寄食という言葉の依存的かつ片利的な側面は、自立性／自律性からなる市民社会のアンチテーゼとして位置づけられてきたと論じる。しかし、森がケアの関係性で論じたように、何かを寄食者だと否定的に捉える我々こそが別の何かの寄食者であり、諸アクターの利己的な行為に

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科